

俳句の題材（三度） I

山口青邨

バラといふ季題がある、バラは大きく分類すれば二種にならう、茨、野茨などがその一つであり、もう一つは西洋バラ、ローズである。後者は特に西洋バラと言はれたことがあるから西洋から来たものであらう、香水や齒磨粉など、いろいろ化粧品の名前やレットテルなどに使はれたりして、近代的な西洋文明が入って来てからのものであることがわかる。茨といふものはむかしからの日本の山野にあったもので、むかしはばらとかいばらと言へばこの花であった、芭蕉や蕪村の時代には西洋バラはまだなかったやうである。

蕪村に「かの東峯にのぼれば」といふ前書で、次のやうな句がある、

花いばら故郷の路に似たるかな 蕪村

これは野生の茨を詠んだものだが、案外近代的香氣と感覺をもつてゐる、この咏嘆、このセンチメンタリズムは吾々の今日のそれに近いものである。

虚子先生に次のやうな句がある、

薔薇剪つて短き詩をぞ作りける 虚子

これは正しく西洋バラで、朝露のおくバラを一輪きつて机上に挿し、詩を作る――といふ、ネオセンチメンタリズム（その當時として）の作品だ、これはどうしても野茨ではなくて、西洋バラでなければならぬ。

洋畫家がよくバラを描く、個展などに行つて見ると十點か十五點飾つてある繪がみんなバラばかりのことがある、一見殆ど同じやうに見えるが、よく見ると決して同じではない。これは同じ作者の場合だが、何かの展覽會で作者が皆違つてゐる場合でも、バラを描いたものが必ず幾點かある、そして夫々違つたものを描いてゐる。もしこれがただの類似品であるなら、何の價値もないのだが、それぞれの人の個性が出てゐて、決して同じバラにはなつてゐない、それであればこそ尊いのである。

東洋にも牡丹など描いたものは昔から澤山ある、中國でも日本でも澤山描かれてゐる。この花は西洋のバラのやうに東洋的クラシックをもつてゐる、そして名作と言はれるものにはやはり同じものはない、むかしの傑作の牡丹があり、今日の傑作の牡丹がある。

題材といふことについて、その作品として新鮮であり、人に訴へる場合を考へて見るに、

- (1) 題材そのものが新しい
 - (2) ものの見方が新しい
 - (3) 表現の方法が新しい
- かういふことになると思ふ。